



佐藤クリスタル

国際交流員コーナー

CIR's Corner

2026年2月 - 第44号



皆さん、こんにちは！江別市国際交流員の佐藤クリスタルです。「国際交流員コーナー」とは、私が毎月作成する国際交流や多文化についての記事です。様々な興味深い国際的なテーマを紹介します。

今月のテーマ：岩越ミヨ

12月に中学生の国際交流事業の引率としてアメリカ合衆国オレゴン州グresham市を訪れました。今年の受け入れ先はウエストオリエントミドルスクール(WOMS)という小さな中学校でした。オリエントという地区は、姉妹都市であるグresham市と合併しており、中心街から約8.5km東に位置している田舎の地方です。畑やクリスマスツリーの牧場が多いです。

校長先生は、グresham市の歴史についての本から、オリエント地区の歴史的な人物についての記事をコピーしてくれました。岩越ミヨという日本人開拓者についての記事です。興味深い話だと思うので、今月は岩越さんを紹介したいと思います。

岩越さんは、1880年に最初にオレゴン州に定住した日本人ですが、長年にわたり、グresham開拓者墓地の無名の墓に眠っていました。グresham市の開拓者を調査して

いたグresham市民のマーガレット・オクラシンスキーさんと江別市とグresham市の姉妹都市提携の際に通訳を務めた札幌市の杉岡昭子さんが1978年にその墓地で偶然出会いました。杉岡さんは、日系アメリカ人の歴史に興味を持っており、岩越さんの

墓を探していました。夫や家族の墓はありましたが、岩越さんの墓石がなかったことを、二人はとても不思議に思っていました。オクラシンスキーさんは自分の調査をやめ、杉岡さんと一緒に岩越さんの歴史を調査することにしました。

岩越さんはなぜオレゴン州に行くことになったのでしょうか。夫のアンドリュー・マッキノンさんと同行したのです。マッキノンさんはスコットランド・アーガイルシャー出身で、農業をするため、オーストラリアに移住しました。12年間そこで働きましたが、干ばつや病害のせいで成功できず、別の場所で挑戦することにしました。当時の日本は明治時代で、外国の農業技術を導入するために、政府が海外から農家を積極的に招いていた時期でした。マッキノンさんはその「お雇い外国人」として日本に渡り、東北で元侍に農業を教えることになりました。良い先生だったようですが、日本語が分からなかったせいか、58歳の時、28歳の岩越さんと、岩越さんの5歳の娘、ニトバ・タマさんと一緒にアメリカのオレゴン州に渡りました。その後、岩越さんとタマさんは日本に帰ることはありませんでした。

ちなみに、タマさんの実父は謎です。タマさんは純粋な日本人だと思われていましたので、マッキノンさんは実父ではありません。杉岡さんの調査によると、偉い人の非嫡出子の可能性が高いそうです。タマさんの名前は恐らく「玉」という字で、英語の意味から、「ジュエル・マッキノン」という通称名を利用することもありました。

オレゴン州に到着した後、マッキノンさんは現代のWOMSの近くに製材所を設立し、東洋から来た妻と娘にちなんで「オリエント製材所」と名付けたとされています。その製材所の周りにできた町は「オリエント」と呼ばれるようになりました。



岩越さん(中)、弟のリキさん(左)、娘のタマさん(右) (Gresham Historical Society)

6年後、1886年12月9日に、マッキノンさんは64歳で亡くなりました。それから岩越さんはマッキノンさんの共同経営者のロバート・スミスさんと結婚しましたが、彼もまもなく亡くなりました。

マッキノンさんとスミスさんの財産を相続した岩越さんはかなりのお金持ちになりました。しかし、娘以外、家族がいなく、孤独だったでしょう。日本から弟のリキも移住し、腕利きのギャンブラーになり、「ムカデのリキ」と呼ばれていました。そして、1885年にサンフランシスコからポートランドに移住した18歳のビジネスマン、高木慎太郎さんは、東の森の中に、美しい日本人女子が住んでいるという噂を聞きました。オリエント町まで行ってみると、11歳のタマさんと出



岩越さん(左)、タマさん(右)とタマさんの子どもたち (Gresham Historical Society)

会い、1891年に二人は結婚しました。オレゴン州で初めての日本人の結婚でした。タマさんと慎太郎さんはオリエント町で子ども6人を育てました。岩越さんはやっとアメリカで家族ができました。

1890年代から1900年代にかけて多くの日本人がお金を稼ぐためにアメリカの西海岸に移住しました。岩越さんと家族は英語ができ、コミュニティーに溶け込んだ有力な家庭でしたので、オレゴン州に新たに到着した日本人は岩越さんに助けを求めました。岩越さんとタマさんは部屋やご飯を提供し、慎太郎さんは鉄道建設の仕事を紹介しました。岩越さんはポートランド周辺に住んでいた日本人と日系人の中で有名人になり、「女帝」と呼ばれるようになりました。

女帝のような存在であっても、悲劇がありました。タマさんと慎太郎さんの6人子どもの中で、大人まで生きられたのは3人だけでした。長女のマミーさんは振られた求婚者に撃たれて殺されました。次女のミニーさんは13歳で亡くなり、三女のマーガレットさんも子どもの時に亡くなりました。四女のハナさんは何回か結婚しましたが、子どもがいませんでした。長男のロバートさんはオリエントでガソリンスタンドの経営をしました。次男のマックスさんは4人の子どもがいましたが、離婚してカリフォルニア州に引っ越し、数年後亡くなりました。

岩越さんは1931年に79歳で亡くなりました。グレシャム

市に残っていたタマさん、慎太郎さん、長男のロバートさんは、1942年に家から追い出され、アイダホ州にあった日系人の強制収容所に送られました。戦争が終わっても、グレシャム市に戻りませんでした。1966年に、アイダホ州でタマさんは93歳で亡くなり、40日後慎太郎さんは100歳で亡くなりました。オクラシンスキーさんと杉岡さんが岩越さんの調査を始めた数年前、長男のロバートさんは撃たれて殺されました。何人かの近所に住む人以外、岩越さんを知っていた人はもうほとんど生きていませんでした。

グレシャム開拓者墓地で、マッキノンさん、タマさんの娘たち、そして次男のマックスさんの長男と次男は永眠しています。しかし、「女帝」と呼ばれる程の岩越さんの墓がなかった理由は、人種差別でした。岩越さんが亡くなった1931年に、反日感情が高まっていたので、グレシャム市民は開拓者墓地で埋葬するのを反対しました。その理由で、岩越さんの墓に墓石を立てず、代わりに小さな杉の木を植えました。47年後、とても立派な杉の木になり、その木の下で杉岡さんとオクラシンスキーさんが調査を始めました。もし二人が出会わなかったら、岩越さんのことが歴史に忘れられていたかもしれません。1988年に、グレシャム市はようやく岩越さんの記念碑を杉の木の下に立てました。岩越さんのひ孫(タマさんの次男のマックスさんの娘)が式に出席しました。

私はこの歴史を知り、日本とグレシャム市の繋がりをさらに強く感じました。来年度の訪問の時に、岩越さんの記念碑を見に行きたいと思っています。★



1920年代の岩越さん (Gresham Historical Society)

お問合せ先
教育部 生涯学習課 国際交流員
〒067-0074 北海道江別市高砂町 24-6
Tel: 011-381-1049 Fax: 011-382-3434

Sharon Nesbit (1988 年) 「Forgotten Pioneer」『Gresham Outlook』1988 年 5 月 18 日、p.1B
Sharon Nesbit (1988 年) 「First Japanese Immigrant had life of tragedy, loss」『Gresham Outlook』1988 年 5 月 21 日、p.4A
Sharon Nesbit (1988 年) 「Cemetery plot tells story of first Japanese family」『Gresham Outlook』1988 年 5 月 25 日、p.6A